オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ

鈴木 創[1*]

Workshop on making a conservation plan for the Ogasawara Greenfinch

Hajime SUZUKI[1*]

1. 小笠原自然文化研究所（〒100-2101 東京都小笠原村父島字西町）
Institute of Boninology, Nishimachi, Chichijima, Ogasawara, Tokyo 100-2101, Japan.
* hajime@ogasawara.or.jp (author for correspondence)

要旨

2020 年 9 月〜2021 年 1 月にかけて、IUCN CPSG が開発した PHVA-WS プロセスを使用したオガサワラカワラヒワ保全計画づくりワークショップ（以下、WS）を開催した。目的は、本種の絶滅を回避するためのアクションプランを多様な関係者でつくることである。一刻の猶予もない状況であり、WS で生まれた絶滅回避策を、小笠原村民と関係者のみならず、広く国内、世界の人々に知って頂きたい。そして、対象種の保全施策に導入・反映されることを強く願っている。なお、非常に厳しい現状から、当面 3 年間程度の絶滅回避に必要不可欠なアクションプランに絞り議論しており、3〜5 年後の見直しを前提としている。

キーワード

Chloris kittlitzi、アクションプラン、国際自然保護連合、個体群と生息地の存続可能性評価、保全計画専門家グループ

１. オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップの概要

１−１. オンラインによる飛び石開催

オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ（以下、WS）および関連イベントは、世界的なコロナ渦にあった 2020 年の 9 月 22 日〜翌 2021 年 1 月 17 日にかけて実施された。実施された WS の根幹となる主要プログラムについて表 1 に示す。なお、WS への関心やオガサワラカワラヒワの知識を深めるために伴走プログラムを実施した（天谷ほか、2022；川上、2022）。WS の準備および実施時期は、コロナ渦によって小笠原諸島への渡航制限がかかる状況にあり、IUCN に推奨されている現地集合、全員参加の合宿形式等は困難であった。このため、小笠原在住の民間組織であるアイランズケア・小笠原自然文化研

究所を中心に組織されたオガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ実行委員会では、オガサワラカワラヒワの生息地である小笠原諸島から多くの住民参加が可能となるように母島および父島を拠点として実現可能な開催方法を模索した。最終的に、オンラインによる飛び石的な複数回開催、補助的な講演会等の開催などを組み合わせた変則な形態でWS を実施した。WS 主催はオガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ実行委員会で、（一社）Islandscare および（特非）小笠原自然文化研究所が共催した。さらに、本大会では次の 28 団体が後援した。小笠原海運（株）、オガサワラシジミの会、おがさわら人とペットと野生動物が共存する島づくり協議会（おがさわら動物協議会）、（一社）小笠原母島観光協会、小笠原村、（一社）小笠原村観光協会、小笠原村教育委員会、（特非）小笠原野生生物研究会、環境省関東地方環境事務所、（公財）日本自然保護協会、（公財）世界自然保護基金ジャパン（WWF ジャパン）、東京都小笠原支庁、（公社）東京都獣医師会、東京都立大学小笠原研究委員会、（特非）どうぶつたちの病院沖縄、２９９の会、（特非）日本ガラパゴスの会、（一社）日本生態学会、日本鳥学会、日本島嶼学会、（公財）日本野鳥の会、（一社）バードライフ・インターナショナル東京、認定 NPO 法人バードリサーチ、保全計画専門家グループ日本委員会（CPSG-japan）、ボニンインタープリター協会（BIO）、（公財）山階鳥類研究所、（一社）リアルコンサベーション、林野庁関東森林管理局。

表 1. オガサワラカワラヒワ保全計画作り WS における保全目標の投票結果

Table 1. Voting results for conservation goals in the Ogasawara Greenfinch PHVA workshop

順位	得票数	保全目標
1	73	域内目標①：母島属島で安定した繁殖環境を創出する（ドブネズミ対策）
2	36	共(H)目標②-2：集落以南でのノネコを低密度化する
3	29	域内目標③：生物学的な情報収集を促進する
4	28	域外目標②：小笠原での飼育と繁殖
5	24	共(S)目標①：「カワラヒワの会（仮称）」をつくる、資金集めの手段を検討する
6	21	共(S)目標②：島内への認知度100%を目指す（1年）、日本中がオガヒワを知る（3年）
7	20	共(H)目標③、域内目標②-1：母島における安全な餌場、水場を創出するための検討を行う
8	15	域内目標④：最悪のシナリオを考えておく
8	15	域外目標①：動物園（近縁亜種を含む）の飼育による知見の集積
10	12	共(H)目標①-1：集落以南のネズミの一斉防除に向けた情報共有を始める
11	6	共(H)目標①-2：希望するすべての畑のネズミ防除対策を実施する
11	6	域内目標②-2：母島におけるオガヒワの繁殖地としての可能性を評価する
13	5	共(H)目標②-1：集落の適正飼養のために動物医療体制を確保する
14	3	共(S)目標③：情報収集する場所を作る

1－2．ワーキンググループ

奨励されている WS では、生息域内、生息域外、地域の 3 つのワーキンググループ構成が通常型である。今回の WS では、生息域内、生息域外、共生社会 H（habitat）、共生社会 S（society & system）、PVA 分析の 5 つのワーキンググループを構成し、グループ別また横

断的に議論を実施した。通常の WS での地域に当たる、最も住民が多く参加するワーキンググループは、無人島で繁殖し有人島に飛来するというオガサワラカワラヒワの生態を考慮して、有人島を中心にオガサワラカワラヒワと人の暮らしを考える場としての共生社会 H（habitat）と、多様な法律制度等がありながら絶滅の危機が続いている本種を取り巻くしくみの問題を考える場としての共生社会 S（society & system）に二分した。

１−３．専門ワーキンググループの設置

常設のワーキンググループにおける議論において、より専門的な議論が必要とされた場合には、別途専門グループ会合を設けて、情報の整理や議論を行った。今回設置した専門ワーキンググループは、感染症、気象災害（台風や干ばつの影響）、国内における近縁種の保護・飼育現状の 3 グループであった。

１−４．WS 開催の状況

2020 年 9 月に生息域内・域外の専門家および住民フィールドワーカーらによる域内・域外合同 WS（参加 23 名、約 8 時間）を開催した。続けて、10 月に域内コアメンバーによる会合（参加 9 名、約 5 時間）、域外グループの 2 回目の会合（参加 22 名、約 5 時間）を開き「域内および域外における生物学的な情報の整理」と、「課題の抽出」を行った。また、WS 本大会参加予定の地域住民を中心に、専門家 WS で整理された情報を共有するための講演会（参加 120 名、約 5 時間、講演：川上和人、川口大朗、齋藤武馬、南波與之）を実施すると共に、“地域社会における絶滅危惧種の保全”を考えるために、同じ亜熱帯島嶼の沖縄におけるヤンバルクイナの保全事例を学ぶ座談会（参加約 80 名、2 時間、講演：長嶺 隆）を開催した。

この間のすべての情報（未発表資料等を含む）を整理したブリーフィングブックを作製し、参加者全員に配布した上で、2020 年 12 月に本大会を実施した。本大会では 96 名の議論参加者、約 11 名の住民スタッフのサポートを得て、「目標の設定」と「保全計画づくり」を行った。なお、専門家 WS で整理された生息域内の深刻な状況から、本大会では、今後 3 年間の目標および行動計画に限定して議論を行った。その後については再度関係者が集まり、再構築することとした。

WS における詳細な議論内容については、本特集のワーキンググループ別の報告に譲り、ここでは簡単に全体的な結果を述べる。表 1 に、本大会における保全目標の投票結果を示した。特に優先順位の高い目標をみると、1 位は、無人島群の母島属島でドブネズミ対策を実施して、オガサワラカワラヒワの安定した繁殖環境を創出すること、2 位は、繁殖後のリスクとなっている飛来地・母島におけるノネコの低密度化、3 位は、オガサワラカワラヒワの生物学的な情報収集の促進となり、上位はすべて小笠原の生息地における取り組み事項となった。次いで、4 位は、現地・小笠原における飼育と繁殖の実現で、5・6 位では、「オガサワラカワラヒワの会（仮称）」をつくる、保全資金を集める手段の検討、島内

のオガサワラカワラヒワの認知度向上（100%を目指す）が続くなど、官民共通の保全体制作り得票が集まった。

図 1 に、これら目標と関連して整理されたオガサワラカワラヒワをとりまく脅威を示した。個体数の減少を引き起こしている脅威は、域内、域外にまたがり、かつ、生物情報、生息環境から、社会的な体制や認知の欠如に至るまで多様な関係性を見せた。本大会では、投票順位に従い、目標を実現するための行動計画について各ワーキンググループで議論した（堀越、2022; 鈴木、2022; 佐々木、2022; 向・金子、2022）。WS および関連イベントへの総参加者数は 160 名以上、総議論時間は 30 時間以上（WS 参加者向け講演／座談会を含む）となった。うち島民参加者（行政赴任職員含む）は 80 名となった。

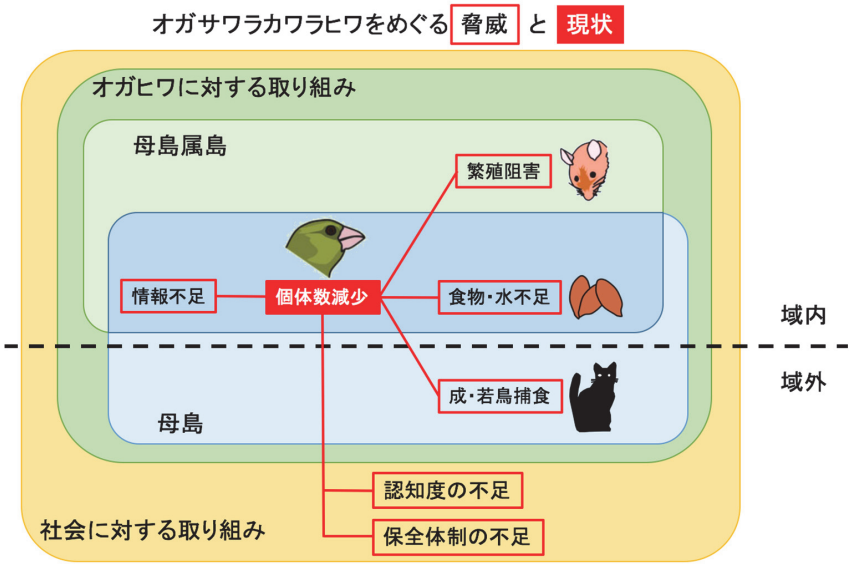

図 1. オガサワラカワラヒワをめぐる脅威の関係性
生態学的・社会学的な複数要因が、生息域内外にまたがって存在している。
Figure 1. Threats to the Ogasawara Greenfinch
Multiple ecological and sociological factors are present both within and outside the habitat.

2. 引用文献

天谷 優里・宮澤 りおん・足立 祥吾 (2022) オガサワラカワラヒワの保全に関する島内での取り組み. 小笠原研究 48: 191-201.

堀越 和夫 (2022) 生息域内ワーキンググループ報告. 小笠原研究 48: 67-77.

川上 和人 (2022) オガサワラカワラヒワに関する島外への普及啓発の取り組み. 小笠原研究 48: 203-209.
向 哲嗣・金子 隆 (2022) 共生社会(S)ワーキンググループ報告. 小笠原研究 48: 115-139.
佐々木 哲朗 (2022) オガサワラカワラヒワ共生社会 H ワーキンググループ報告. 小笠原研究 48: 105-113.
鈴木 創 (2022) オガサワラカワラヒワ生息域外ワーキンググループ報告. 小笠原研究 48: 79-90.

SUMMARY

Workshop on making a conservation plan for the Ogasawara Greenfinch

Hajime SUZUKI[1*]

1. Institute of Boninology, Nishimachi, Chichijima, Ogasawara, Tokyo 100-2101, Japan.
* hajime@ogasawara.or.jp (author for correspondence)

From September 2020 to January 2021, we held a workshop to develop a conservation plan for the Ogasawara Greenfinch using the PHVA workshop process developed by the IUCN CPSG. The objective was to create an action plan to avoid the extinction of this species with various stakeholders. Since there is no time to lose, we would like the people of Ogasawara Village and related parties, as well as people in Japan and around the world, to know about the measures to avoid extinction developed at the workshop. We strongly hope that the measures to avoid extinction developed in the workshop will be known not only to the people of Ogasawara Village and related parties, but also to a wide range of people in Japan and around the world. Due to the extremely difficult situation, we have narrowed down the discussion to the action plans that are essential for avoiding extinction for the next three years, and we assume that they will be reviewed in three to five years.

Key words

Action Plan, *Chloris kittlitzi*, Conservation Planning Specialist Group, International Union for Conservation of Nature, Population & Habitat Viability Assessment